

VOICE 「大阪労山ニュース」を考える

常任理事（機関紙部・平和と登山委員会） 大西清見

私は昨年3月まで約8年間「大阪労山ニュース」の編集を担当していました。昨年3月からは諸事情で「大阪労山ニュース」は連盟事務局に編集をお願いしました。しかし、このような事情も、「大阪労山ニュース」は以前のような形態で定期的にしっかり発行することができて良かったと考えています。

「大阪労山ニュース」はおおまかに VOICE、表紙&表紙裏、理事会議事録、専門部のページ、山岳登山の世界、編集後記で構成されています。私の8年間の編集担当時代とこの一年間でなかでも反響があったのは、VOICE、表紙&表紙裏、山岳登山の世界でした。今回は VOICE のページについて私なりに考えたことを少し書いてみようと思いました。

VOICE はその月ごと連盟関係の行事に対応した、担当者の一つのエッセイ的なものと考えています。この一年の VOICE の表題を列举してみると、自然保護とクリーンハイク、平和行進、子どもの冒険学校、長距離縦走、女性委員会、障登 PT、組織部会員拡大、大阪労山救助隊の訓練、事務局（乗って残そう登山の足）、理事長のメッセージなどでした。いずれも各専門部の課題や考え方を述べられていましたが、なかでもメール等で反響があったのが事務局長、理事長の VOICE でした。

2024.2月号の大見事務局長の VOICE 「乗って残そう登山の足」は、鉄道やバス廃止問題を考察されていました。20年ほど前は夜行急行で山に向かい、ホームで友を待ち、列車の中では友と酒を交わす。知っている他の会のメンバーを探し、また酒を飲む、そんな文化が楽しかった、と書かれていました。昨年、JR西日本が発表したローカル線の赤字額は年237億円、その一部がリストにされていました。これらの区間は将来について地元と話し合うとのことだが、鉄道は血管と同じネットワークであるがゆえに、全体として機能する、バス転換と言っても運転手不足なので即廃線もあり得る、どうにかならないだろうか、登山者が乗車してもたかが知れているが、少しでも協力できないだろうか、知恵を出し合っていきたい、と訴えておられました。少しでも協力を、知恵を出し合っ…同感です。今、国内は北陸新幹線の金沢～敦賀延伸でニュースが賑わっていますが、切り捨ての地方ローカル線の存続問題についてもみんなで真剣に考えていきたいものです。

2024.3月号の高橋理事長の VOICE 「大阪労山の行事に口も顔も出しましょう」では、連盟事務局の BOX にたまった機関紙や各専門部の行事案内などが積まれたままのクラブが複数あることに、「クラブ運営はどうしているんだろう」と案じておられました。コロナのせいもあって、話し合うことが少なくなり大阪労山の情報も会員には伝わっていないんだろうな。とても残念です、とも。高橋さんが労山に入って嬉しく思ったのは、老若男女問わず話し合えること、この数年をみても新しい気の合う仲間が増えたこと、クラブで話し合い楽しい山行計画で盛り上がるのではないかと、などメッセージも書かれていました。最後に大阪労山で複数の行事や運営に参加して高齢になっても楽しむ方がおられます。所属クラブの仲間と手を携え、大阪労山の行事に口も顔も出そうではないか、そこには苦労や苦慮もあるけれど、やはり手放せない醍醐味があるんです、と結んでいました。ある会の友人からのメールで、「理事長の VOICE に同感、私の会にもあてはまるのではないかと」メールをくれました。今回の理事長のメッセージから大阪労山全体でも、各会でもみんなで話し合っ、みんなで楽しく山に向かって行ける労山をつくっていきたくて考えました。